川崎医療福祉学会誌　Vol. 12　No. 1　2002　27–43

原　著

母親クラブ活動調査からみた子育て支援に及ぼす母親クラブの役割と課題

八重樫　牧　子[*1]

要　　約

現在の日本では，都市化，核家族化，少子化の進展に伴い，家庭が孤立し，地域のつながりが希薄になり，家庭や地域の養育機能が低下している．その結果，子育て中の母親は子育て不安や子育て負担を感じている．これを軽減するためには，家庭においては父親の子育て参加，地域においては積極的な子育て支援のネットワークづくりが求められている．

そこで本研究では，地域の子育てグループの一つである母親クラブの402名の母親を対象に留置き法による調査を実施し，母親クラブの活動状況や活動効果について検討を行った．その結果以下のことが明らかになった．母親クラブの母親の平均年齢は約40歳と比較的高かった．母親クラブへの入会期間が長くなるほど，行事の出席回数，会員と話し合う機会，父親の参加及び役員経験が多かった．母親クラブの活動については入会期間とは関係なく，ほとんどの母親が満足していた．母親クラブ活動が母親自身や子どもに与える効果についての母親の評価は高かった．しかし，父親に与える効果に対する評価は低かった．今後，母親や子どもが楽しい時間を過ごせるような活動内容をより充実させることが必要である．また，父親が母親クラブに参加できる機会や行事を工夫していくことも必要である．このように母親クラブの活動内容を充実することによって，地域の人達との交流が深まっていくと推察される．

はじめに

核家族化，少子化による家庭環境の変化に伴い，子育ての責任が母親に集中するとともに，子どもとの接触体験も乏しいまま母親になる者も増えてきている．また，地域社会の構造の変化によって，母親同士が子育ての情報を交換し，助け合う機会も少なくなってきており，子育て不安・負担を訴える母親も増えてきる．さらに働く母親が増加している中で，働く母親に仕事・家事・子育てという過重な負担がかかってきている．特に最近では実母による児童虐待の件数も増加傾向にあり，親子関係の危機対策を含む子育て支援が重要な課題となってきている．

このような母親の子育て負担・子育て不安を軽減するには，父親が子育てに参加するとともに地域の多くの人が子育てにかかわることが重要であると指摘されている[1]．また，児童相談所などの相談機関による積極的な子育て支援や母親同士の子育て支援ネットワーク作りが求められている[1]．

子育て不安や子育て環境及び子育て支援に関する研究として牧野[2−7]の一連の研究がある．牧野は育児不安尺度を作成し，母親の育児不安と子育て環境との関連性について研究を行った．大日向[8]は母親の育児不安に関する調査から，母親の生活環境や母性を捉え直す必要性について言及している．服部ら[9]は，子どもを囲む環境と乳幼児の心身の発達を０歳から６歳まで追跡した調査結果を報告した．縦断的研究としては，菅原ら[10]も子どもの問題行動の発達と親の養育態度の関連について生後11年間にわたって研究をすすめ，子どもの精神的健康をめぐるサポートのあり方を考察している．川井ら[11−17]は，乳幼児をもつ母親の育児不安尺度を作成し，育児不安の構成要素を分析することによって，臨床的に有効なアセスメントに関する研究を行った．諏訪ら[18]は，鳥取県と埼玉県の保育園に１歳の子どもを預けて働く母親を対象に「親子の生活と意識調査」を実施し，各県の子育ての実態と母親のストレス比較検討し，保育サポートのあり方を考察している．

*1 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科
（連絡先）八重樫　牧子　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学

また，八木[19]は，育児への不安を測定する尺度を用い，育児観と育児へのサポートとの関連について分析を行った．住田ら[20]は，夫婦関係のあり方を父親の育児参加の視点から捉え，その夫婦関係のあり方が母親の育児不安にどのように影響を与えているか明らかにした．さらに，両角ら[21]は，牧野の育児不安尺度を用い，乳幼児期の子どもを持つ母親を対象に子どもに対する虐待も視野にいれて，育児不安の実態と育児不安と虐待の関連について検討を行った．

これらの研究は，子育ての実態，子育て不安などの母親の問題，子どもの成長・発達と母親の子育ての関連性及び子育てサポートのあり方について検討を加えたものである．しかし，母親自らが問題を解決する能力を高めるための子育てグループに関しては，実践事例の報告に留まり，その活動効果を分析したものは必ずしも多くない．子育てグループの活動効果に関する調査としては，以下のものをあげることができる．牧野[6]は，横浜市，藤沢市に開設された乳幼児家庭教育学級に参加した母親延べ188人を対象に学習の始めと終わりに集合自記法による調査を実施し，子どもを預けて学級に参加し学習することが母親や子どもにどのような利点をもたらすか検討した．中村ら[22]はO県O市の地域の自主的な育児グループである親子クラブの会員を対象に，子育ての実態，育児グループの参加状況やその活動効果について検討した．筆者ら[23,24]も，幼稚園と小学校に通う子どもの保護者1,000人を対象とした子育て調査から，自由記述欄に記入した410人の保護者を対象に親子クラブの活動評価や要望について考察を加えている．

本研究ではO県K市の児童館を拠点に子育てにかかわるボランティア活動を行っている子育て支援グループの一つである母親クラブの会員を対象に，留め置き調査を実施し，母親クラブの活動が子育てに及ぼしている効果について検討したいと考えた．まず，母親クラブに参加している母親の子育て環境，子育て観，母親クラブの活動状況及び母親クラブの活動効果を明らかにする．また，入会期間が長くなるほど母親クラブの活動が活発になり，母親クラブの活動を高く評価するのではないかと思われる．そこで，母親クラブの入会期間と母親クラブの活動状況及び母親クラブの活動効果との関連性について考察することを目的とした．

研究方法

1．調査対象

母親クラブについては，『児童健全育成ハンドブック（平成13年度版）』[25]を引用して概説する．

母親クラブは地域における児童を持つ母親等の連帯組織である．平成9年4月現在全国で7,400クラブあり，会員数は37万人である．母親クラブの目的は，昭和23年に厚生省の児童局から出された「母親クラブ結成及び運営要綱」に「家庭の母親に児童の余暇指導，健康，栄養，社会生活訓練等に関する正しい知識を与えることによって，…健全なる児童の生活指導の遺憾なきを期すること」とされている．母親クラブの任務は，①児童の余暇指導，健康，栄養，社会生活訓練等，生活環境等に関する正しい知識を母親に対して付与すること，②母親相互の親睦をはかり，協力をもって児童の社会性を助長すること，③保育所，母子生活支援施設，児童厚生施設（児童館），児童相談所等の協力団体としてこれらとの密接な連携を保ち，児童福祉の増進をはかることである．

昭和48年4月，厚生省児童家庭局長通知「国庫補助による地域組織活動の運用について」（児発第250号）において規定された「国庫補助による地域組織活動要綱」[25]に基づいて，母親クラブに対する国庫補助が開始された．また，翌49年には全国母親クラブ連絡協議会が設立された．国庫補助の対象となる母親クラブは，1クラブ当たり概ね30人以上の会員をもつこと，児童館と有機的な連携をもつこと，会長，委員などの役員を置き関係帳簿など保管することなど，組織的継続的に活動を行うことなどが求められている．また地域において児童福祉の向上を図るために次のような活動を行うことが規定されている．①親子及び世代間の交流，文化活動：「家庭の日」を設けたり「こどもの日」や「敬老の日」などを利用し，親子やお年寄りとの交流を図るため，野外での交流活動を企画実行したり，読書会，映画会，人形劇サークル，地域文化の伝承サークル，料理教室などの文化活動を行う，②児童養育に関する研修会：児童の発達上の特徴や留意点，家庭でのしつけ，安全教育，地域での健全育成の向上に関する研修会などを開催する，③児童の事故防止等活動：地域の実情に応じ，遊び場の遊具の点検，とくに幼児の遊び場の巡回，交通安全活動，非行防止活動等の奉仕活動を行う，④その他，児童福祉の向上に寄与する活動，⑤児童館日曜等開館活動：必要に応じて，原則として月1回以上日曜日・祝日に児童館を利用し児童の居場所の確保を図るとともに，親子行事等の諸活動を行う．平成12年度は1クラブ当たり18万9,000円が支給された．また，「児童館日曜等開館活動」を実施したクラブには別途10万円の補助金が支給された．

現在，母親クラブは全国母親クラブ連絡協議会のもと，32の県や市に連絡協議会を組織している．全国母親クラブ連絡協議会はブロック研修会の開催，総会，全国研修会の開催や季刊紙「母親クラブだより」の発行及び母親クラブの歌の制定などを行っている．また，各県の母親クラブ連絡協議会では交通安全運動や遊具の点検などさまざまの活動を行っている．

O 県には「O 県母親クラブ連絡協議会」が，K 市には「K 市母親クラブ連絡協議会」が組織されている．

K 市には，「K 市児童館条例」（昭和45年４月１日施行）を法的根拠として，K 児童館（昭和47年４月１日設置），K 北児童センター（昭和61年４月１日設置），M 児童館（昭和50年６月１日設置），J 児童館（昭和47年４月１日設置）及び T 児童館（昭和45年４月１日）の合計５つの児童館・児童センターが開設されている[26]．管理は K 市総合福祉事業団に委託されている．K 市の母親クラブはこれらの児童館・児童センターを拠点に活動を行っており，平成13年度は15クラブが組織され，会員人数は631人である．K 市の母親クラブの活動は，先に述べた「母親クラブ結成及び運営要綱」（昭和23年厚生省通達）を法的根拠に実施されており，その活動内容は①親子，３世代間及びその他の交流，文化活動，②児童養育に関する活動（各種研修等），③児童の事故防止活動（遊び場および交通安全点検，非行防止活動等），④その他児童福祉の向上に寄与する活動（母親クラブだより発行，他団体との交流等）である[26]．なお，児童館日曜等開館活動は実施していない．母親クラブに対する補助額は１クラブ18万9,000円で，平成12年度の事業費は2,835,000円であった[26]．K 市の児童館や母親クラブは，児童館や母親クラブに対する国庫補助と共に開始され，典型的な母親クラブ活動を展開しているといえる．

２．調査方法

平成13年４月中旬から５月初旬にかけて，K 市の５つの児童館・児童センターを拠点に活動を行っている母親クラブ（15クラブ・平成13年度会員人数631人）の会員を対象に留置き調査を実施した．各児童館・児童センターの職員を通して母親クラブの会員に調査票を配布した．後日個別に封筒に入れた調査票を各児童館・児童センターに届けてもらい，回収した．

回収率は74.3％（469人），有効回答率は63.7％（402人）であった．

３．調査内容

調査内容は，以下の通りである．①母親・家族の概要（母親の年齢，父親の年齢，子どもの年齢，子ども・家族の人数，近隣家族，居住年数，住宅の種類及び母親の就労状況），②子育て環境（近所とのつきあい，友人とのつきあい，夫の子育て参加状況，子育て困難時の相談相手，子育て知識・情報源及び子育てサークル・グループの参加状況），③子育て観（三歳児神話に対する考え方，性別役割分業意識及び子育て協働意識），④子育て不安（川井ら[12]による29の育児不安項目），⑤母親クラブの活動状況（入会のきっかけ，入会理由，参加の程度，母親クラブ内での友人の有無，満足度及び負担や不満），⑥母親クラブの活動効果（中村ら[22]の親子クラブに関する25活動効果項目を参考に作成した22活動効果項目）であった．

４．分析方法

統計処理は SPSS（WINDOWS 版 Ver. 9）を使用した．母親クラブの活動効果を検討するために，「母親クラブに入ってよかったこと」を尋ねた22項目の選択肢「よくある」に３点，「時々ある」に２点，「あまりない」に１点，「全くない」に０点を付与し，各項目の平均値を求め，母親クラブ活動効果得点を算出した．

母親クラブの入会期間と母親クラブの活動状況や活動効果との関連をみるために，入会期間の長さと①行事の出席回数，②会員の交流，③父親参加，④役員経験，⑤母親クラブの満足度，⑥母親クラブの活動効果との関係をクロス集計表に示し，カイ２乗検定を行った．入会期間の長さは，①１年未満，②１年～３年未満，③３年～５年未満，④５年以上の４つに区分した．

研 究 結 果

１．対象について

調査対象の属性は表１の通りである．

母親の年齢については，30歳代が55.4％と最も多く，次いで40歳代が28.4％，50歳以上が11.2％で，20歳代は5.0％と少なくなっていた．平均年齢は39.4歳で標準偏差は7.3歳であった．夫の年齢は40歳代が40.3％，30歳代が39.1％と多く，50歳以上は15.4％で，20歳代は3.2％と少なくなっていた．平均年齢は41.7歳で標準偏差は7.2歳であった．第１子の子どもの年齢は７～12歳が38.3％と最も多く，平均年齢は12.7歳で標準偏差は8.1歳であった．子どもの人数は2人が55.0％を占めていた．家族人数は４人が40.3％を占めていた．

表1　対象者について

年齢	母親	平均年齢＝39.4歳，SD＝7.3歳，30～39歳：55.4%
	父親	平均年齢＝41.7歳，SD＝7.2歳，40～49歳：40.3%
	第1子	平均年齢＝12.7歳，SD＝8.1歳，7～12歳：38.3%
子どもの人数		2人：55.0%，3人：28.6%
家族の人数		4人：40.3%，5人：21.4%，6人：14.4%，3人：9.5%
母親の就労形態		専業主婦：59.5%，非常勤勤務：24.1%，常勤勤務：8.0%
家族形態		核家族：62.7%，3世代家族：29.1%
近隣家族（非同居）		非同居家族のいる人：69.4%（自分の母親：38.6%，夫の母親：36.8%）
居住年数		10年未満：45.9%（このうち5年未満は19.8%），10年以上：53.5%
住居形態		1戸建住宅：87.1%

母親の就労形態については，専業主婦が59.5%と最も多く，次いで非常勤務が24.1%で，常勤勤務は8.0%であった．

家族形態については，核家族が62.7%と最も多く，3世代家族は29.1%であった．同居はしていないが近くに家族のいる人は69.4%と約7割を占めており，自分の母親が38.6%と最も多く，次いで夫の母親が36.8%となっていた．

居住年数は10年以上が53.5%で，10年未満の45.9%をやや上回っていた．10年未満のうち5年未満は19.8%であった．比較的居住年数が長いことから，住居形態についても87.1%が一戸建て住宅であった．

2．子育て環境について

近所とのつきあいが「よくある」と答えた母親は47.8%，「時々ある」と答えた母親は45.8%で，93.6%の母親が近所とのつきあいがあることがわかった．また，友人とのつきあいについては「よくある」と答えた母親は62.2%，「時々ある」と答えた母親が34.8%で，97.0%の母親が友人とのつきあいがあることが明らかになった．

夫の子育て参加については「よくある」と答えた母親が41.3%，「時々ある」と答えた母親は46.8%で，88.1%の母親が夫の子育て参加があると答えていた．また夫の精神的支えについては「よくある」と答えた母親が40.8%，「時々ある」と答えた母親が44.8%で，85.6%の母親が夫の精神的な支えがあると答えていた．

子育てに困ったり悩んだ時の相談相手については，図1からわかるように，夫が83.1%と最も高く，次に友人の75.9%，自分の父母55.0%であった．子育ての専門機関に相談する母親は3.5%と最も少なくなっていた．

子育ての知識・情報源としては，図2からわかる

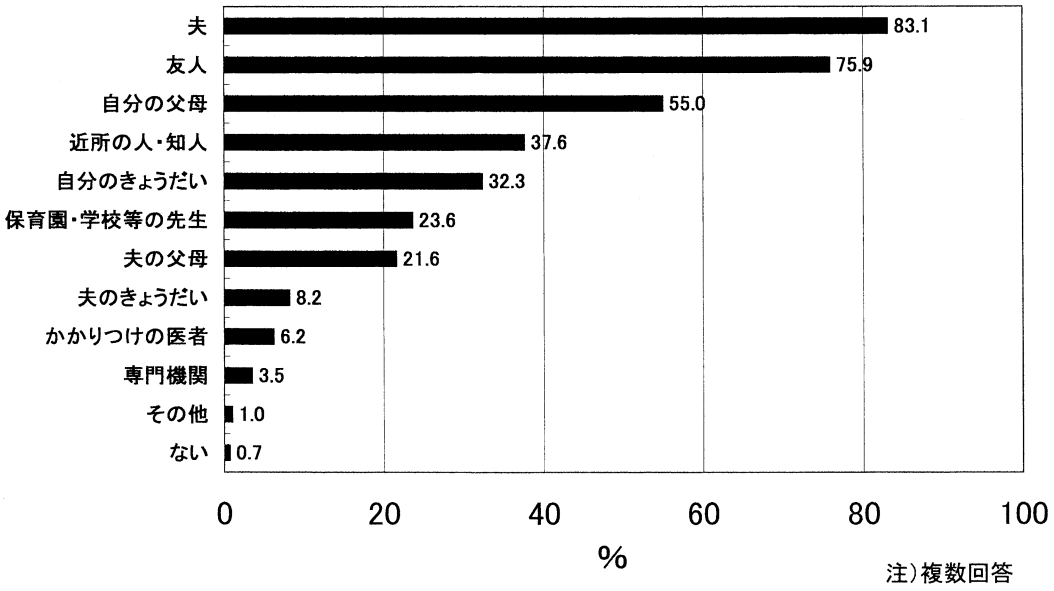

図1　子育ての悩みの相談相手

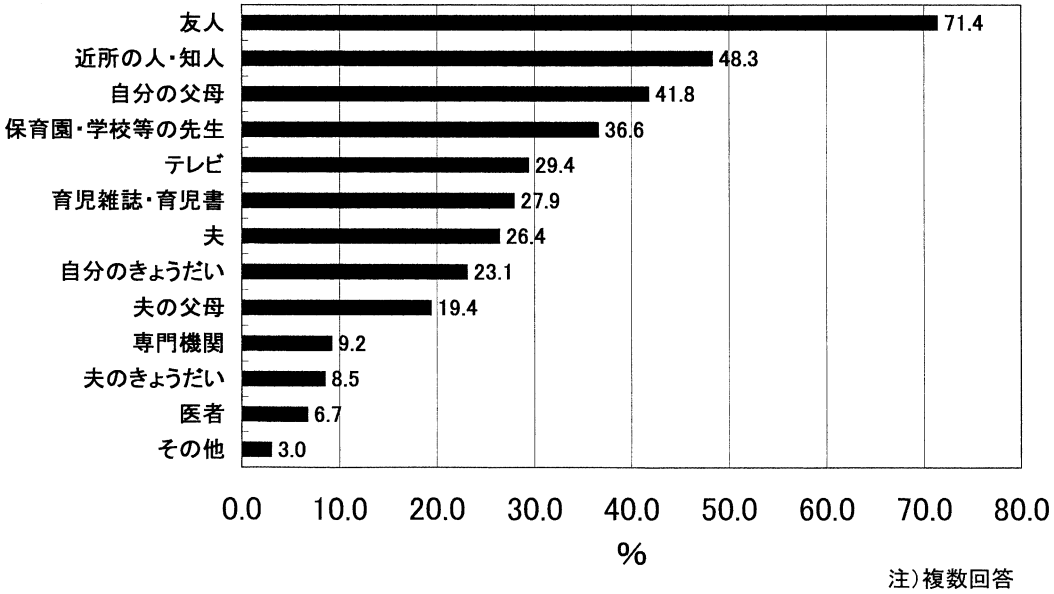

図2　子育ての知識・情報源

ように友人が71.4%と最も多く，次いで近所の人・知人48.3%，自分の父母41.8%，保育園・学校等の先生36.6%の順に多く，専門機関は9.2%と少なかった．

母親クラブ以外の子育てサークル・グループ活動に，65.7%の母親が参加していたが，34.3%の母親は参加していなかった．参加している母親では，地域の子ども活動に参加している母親が25.8%であり，児童館・児童センターの幼児クラブに参加している母親が24.7%でほぼ同数であった．親子クラブに参加している母親は12.7%であった．

3．子育て観について

3－1　3歳児神話の考え方について

「3歳までは母の手で」という3歳児神話に「非常に同感する」は29.9%，「だいたい同感する」は54.2%で約8割の母親が3歳児神話の考え方に同感していた．

しかし，母親の就労形態別にみると，専業主婦の86.6%が同感しているのに対し，常勤勤務の母親は68.1%であり，同感している母親の就労形態における割合は5%以下の危険率で有意に少なくなっていた．年齢による差はみられなかった．

3－2　性別役割分業意識について

性別役割分業について「あまり同感しない」は57.0%，「全く同感しない」は10.4%で約7割の母親が性別役割分業に同感していなかった．母親の就労形態や年齢との関連は認められなかった．

3－3　子育て協働意識について

子育ては夫婦協働で行うべきだという考え方に「非常に同感する」は57.2%，「だいたい同感する」は40.3%で，97.5%とほとんどの母親が同感しており，母親の就労形態との関連はなかった．しかし「非常に同感する」という母親は，30歳代が65.4%であるのに対し，40歳代では47.3%，50歳代では37.1%と少なくなっていた．子育て協働意識と年齢の間には0.1%以下の危険率で有意差が認められた．

4．母親クラブの活動状況

4－1　入会の状況

母親クラブの入会年数は，図3のとおりである．3年未満の母親が48.2%と約半数を占めていたが，5年以上の母親も33.8%と多かった．

入会のきっかけは，図4からわかるように「会員に誘われた」が54.7%と約半数を占めており，次いで「子どもが児童館に参加している」が35.3%であった．

入会の理由は，図5からわかるように「楽しい時

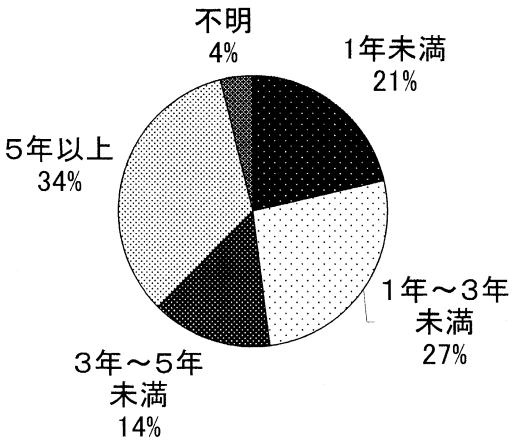

図3　入会年数

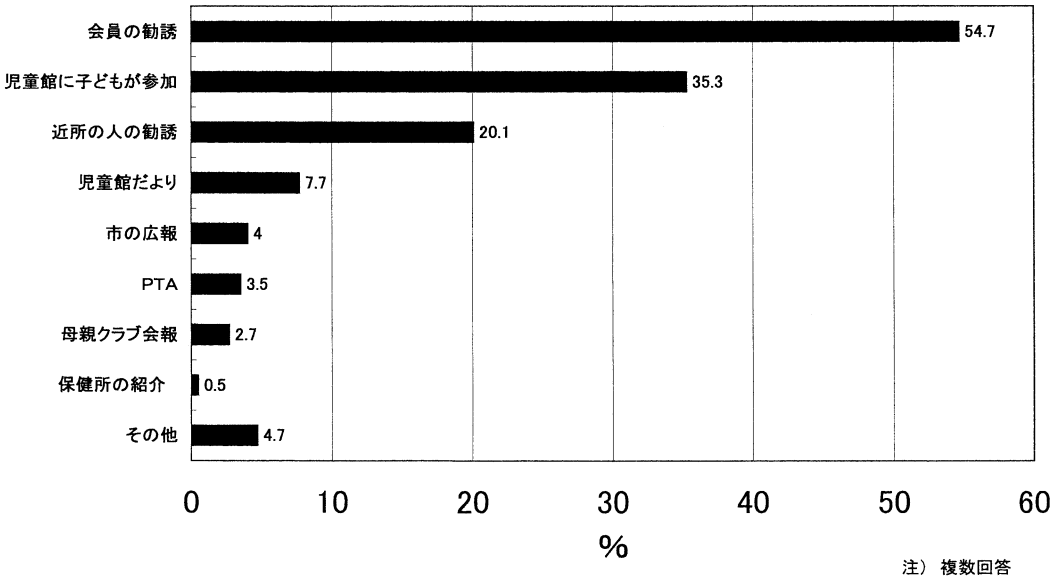

図4　母親クラブ入会のきっかけ

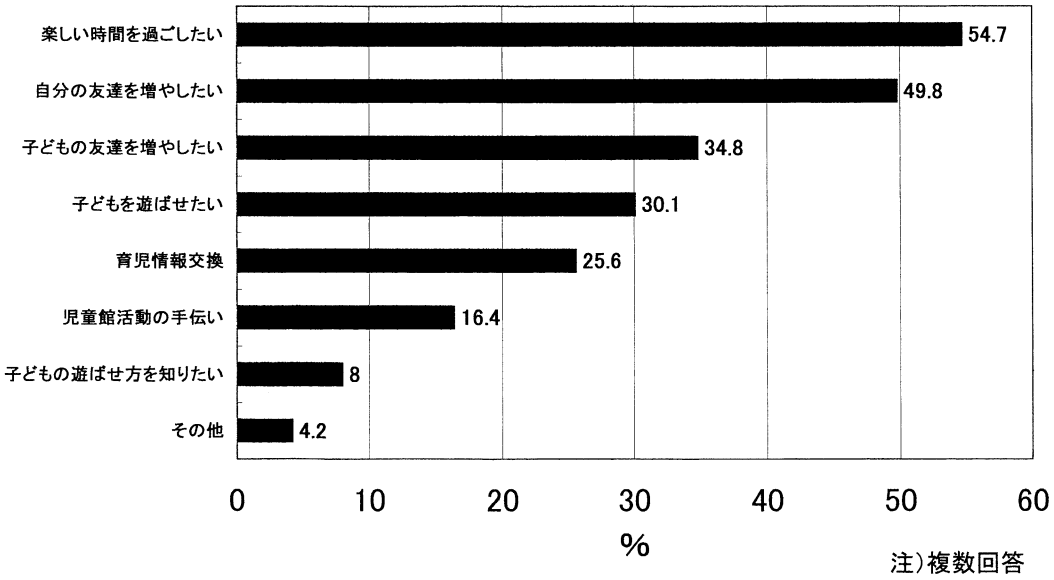

図5　母親クラブの入会理由

間を過ごしたい」が54.7%,「自分の友達を増やしたい」が49.8%と自分にかかわる理由をあげている母親が約半数を占めていた．子どもにかかわる理由をあげている母親は，30%前後であった．

4－2 行事の出席回数

児童館で行われる行事に「年1回～4回出席」している母親が38.5%と最も多く，次いで「年5～9回出席」している母親が19.3%であった．「年20回以上出席」している母親は6.8%と少なかった．入会期間の長さと行事の出席回数との関連性をみたところ，入会期間の長いほど出席回数が多く，表2に示すように0.1%以下の危険率で有意差が認められた．

4－3 母親クラブ内での会員の交流

母親クラブ内で子育てについて話し合うことが「よくある」15.3%,「時々ある」58.3%と約7割が話し合う機会をもっていた．また，入会期間が長いほど，子育てについて話し合う機会も多く，表2に示すように0.1%以下の危険率で有意差が認められた．

母親クラブ内の親しい友人の有無についてみると，親しい友人が「少しいる」52.0%,「たくさんいる」31.8%と約8割の母親に親しい友人が存在した．また，入会期間の長いほど親しい友人がたくさん存在

表2　母親クラブの入会期間と母親クラブ活動効果との関連

	カイ2乗値	自由度	漸近有意確率	有意差
行事の出席回数	278.08	16	0.000	＊＊＊
母親クラブ内での会員の交流	36.95	12	0.000	＊＊＊
母親クラブ内での親しい友人の有無	66.37	12	0.000	＊＊＊
母親クラブへの父親参加	39.07	12	0.000	＊＊＊
母親クラブの役員経験	75.44	4	0.000	＊＊＊
母親クラブの役員をひきうけてもよい	37.21	8	0.000	＊＊＊
母親クラブに対する満足度	8.35	12	0.757	ns
母親クラブに対する負担・不満				
役員をする	3.864	4	0.425	ns
行事への出席	12.287	4	0.015	＊
友達ができない	11.296	4	0.023	＊
時間帯や曜日があわない	18.312	4	0.001	＊＊
父親が参加できない	1.853	4	0.763	ns
子どもへの母親クラブの効果				
子ども同士で遊べる	16.86	12	0.155	ns
家で体験できないことができる	13.83	12	0.312	ns
子どもの友達ができる	18.78	12	0.940	ns
楽しい時間を過ごせる	16.16	12	0.184	ns
母親への母親クラブの効果				
子育て仲間・友人ができる	17.97	12	0.116	ns
子育て情報が増える	7.940	12	0.790	ns
子育ての悩みなど相談できる	17.19	12	0.143	ns
子育ての不安が軽減できる	12.64	12	0.396	ns
子育てのストレスが解消される	13.91	12	0.306	ns
子どもとの関わり方・遊び方がわかる	14.44	12	0.273	ns
ゆとりをもって子育てができる	11.41	12	0.494	ns
楽しい時間を過ごすことができる	15.37	12	0.222	ns
ボランティアとして充実感を感じる	38.26	12	0.000	＊＊＊
父親への母親クラブの効果				
子育て仲間・友人ができる	11.48	12	0.488	ns
子どもの面倒をよくみるようになる	17.41	12	0.135	ns
子育てに関心をもつようになる	17.90	12	0.119	ns
子どもの母親の相談にのるようになる	11.39	12	0.496	ns
母親クラブの活動に協力的になる	17.21	12	0.142	ns
地域への母親クラブの効果				
地域の人が子どもに声をかけてくれる	20.91	12	0.052	ns
地域の子どもに声をかける	22.64	12	0.031	＊
会員以外の母親にも声をかけるようになる	22.43	12	0.033	＊
地域でのつきあいが活発になる	18.66	12	0.097	ns

注1）＊＊＊P＜0.001で有意差あり，＊＊P＜0.01で有意差あり，＊P＜0.05で有意差あり，ns有意差なし
注2）入会期間は1年未満，1年～3年未満，3年～5年未満，5年以上の4つに区分した

しており，表2に示すように0.1%以下の危険率で有意差が認められた．

4－4 母親クラブへの父親参加

母親クラブへの父親参加については，71.0%が参加していない．よく参加する父親は0.3%，時々参加する父親は7.8%で，母親クラブに参加する父親はわずか8.1%にすぎない．しかし，入会期間の長い場合は，母親クラブに父親がよく参加しており，表2に示すように0.1%以下の危険率で有意差が認められた．

4－5 役員経験

役員経験のない母親が70.0%であった．しかし，入会期間が長くなると役員経験も多く，表2に示すように0.1%以下の危険率で有意差が認められた．

役員を引き受けてもよいと思っている母親は20.5%で，引き受けたくないと思っている母親が29.5%とやや多くなっていた．入会期間の長いほど役員をひき受けてもよいと思っており，表2からわかるように0.1%以下の危険率で有意差が認められた．

4－6 母親クラブの満足度

母親クラブ活動に「とても満足」している母親が15.8%，「だいたい満足」している母親が70.3%で，あわせて86.1%の母親が満足していた．また，入会

期間の長さと母親クラブ活動に対する満足度との関連については，表2に示すように有意差が認められなかった．入会期間の短い母親も長い母親も母親クラブの活動に満足していた．

しかし，具体的に母親クラブに対する負担や不満を尋ねたところ，34.0%の母親が無記入で負担や不満を感じていなかった．しかし，残りの66.0%は何らかの負担や不満を感じていることがわかった．その内容は図6に示す通りである．負担・不満の最も多かったのは母親クラブ開催の「時間帯・曜日が合わない」と感じている母親で38.1%を占めていた．また，入会期間との関連をみると，表2からわかるように「役員をすること」や「父親が参加できない」ことに対しては関連がなかった．しかし，入会期間が長くなると「時間帯・曜日があわない」ことや「行事へ出席」することに対しては不満を抱いており，前者が1%以下の危険率で後者が5%以下の危険率で有意差が認められた．また，入会期間が短いと「友達ができない」ことに不満を感じており，5%以下の危険率で有意差が認められた．

5．母親クラブの活動効果

5－1　活動効果の分布

母親クラブ活動が子どもへ与える効果については図7に示した．「家で体験できないことができる」ことに効果があると答えている母親が79.8%であっ

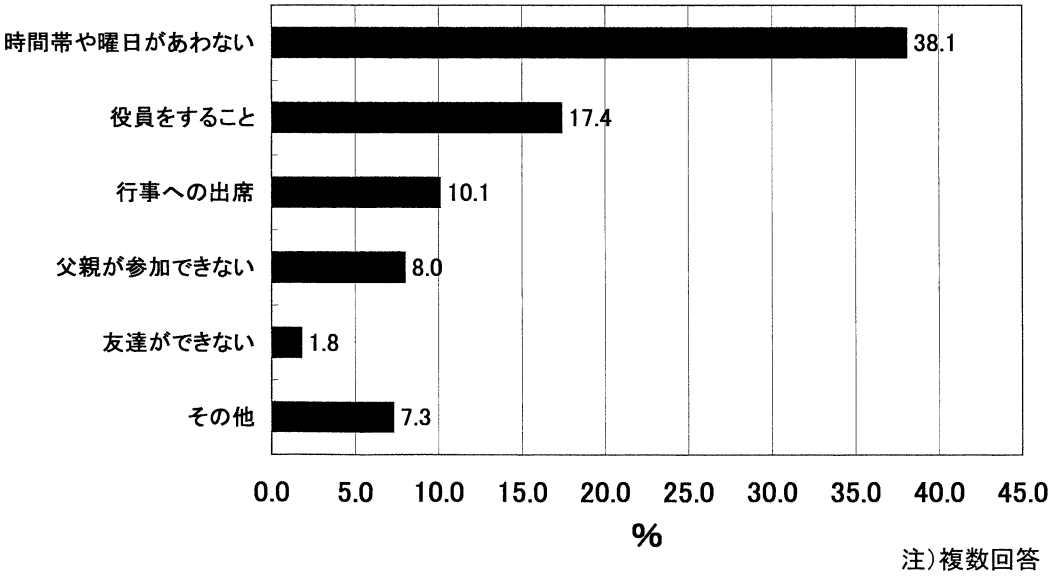

図6　母親クラブに対する負担・不満

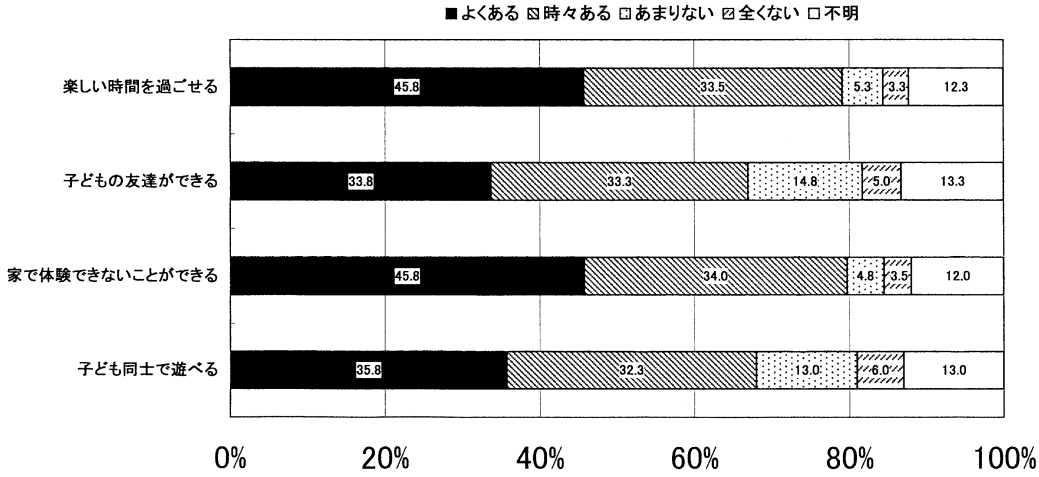

図7　子どもへの母親クラブの効果

た．次いで「楽しい時間が過ごせる」ことに効果があると答えている母親が79.3%と高かった．その他の項目でも約7割が子どもへの効果があると答えていた．

母親クラブ活動が母親自身へ与える効果については図8に示した．「楽しい時間が過ごせる」が85.8%と最も高く，次いで「子育て情報が増える」が80.5%，「子育て仲間・友人」ができるが80.3%であった．「ボランティアとして充実を感じる」が63.8%とやや低くなっていたが，その他の項目でも約7割の母親は効果があると答えていた．

母親クラブ活動が父親へ与える効果については図9に示した．「子どもに関心をもつようになる」32.6%，「子どもの面倒をよくみるようになる」30.3%，「子どもの母親の相談にのるようになる」29.1%であり，いずれも35.0%以下であった．

母親クラブ活動が地域に及ぼす効果については，図10に示した．「地域の子どもに声をかける」60.8%，「地域の人が子どもに声をかけてくれる」59.5%，「会員以外の母親にも声をかけるようになる」54.0%，

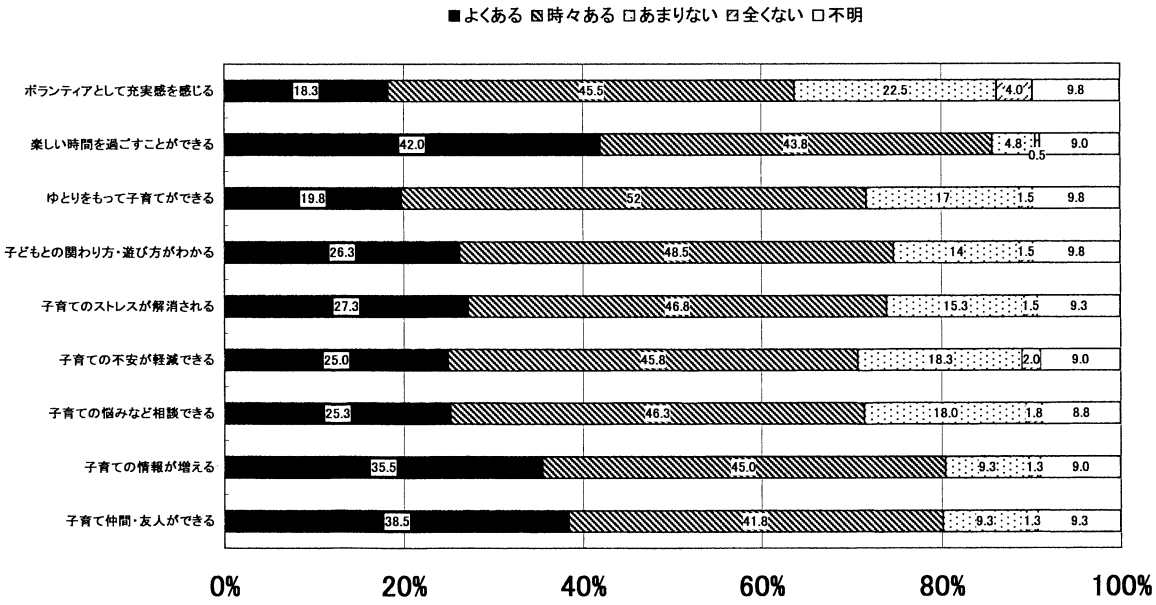

図8　母親への母親クラブの効果

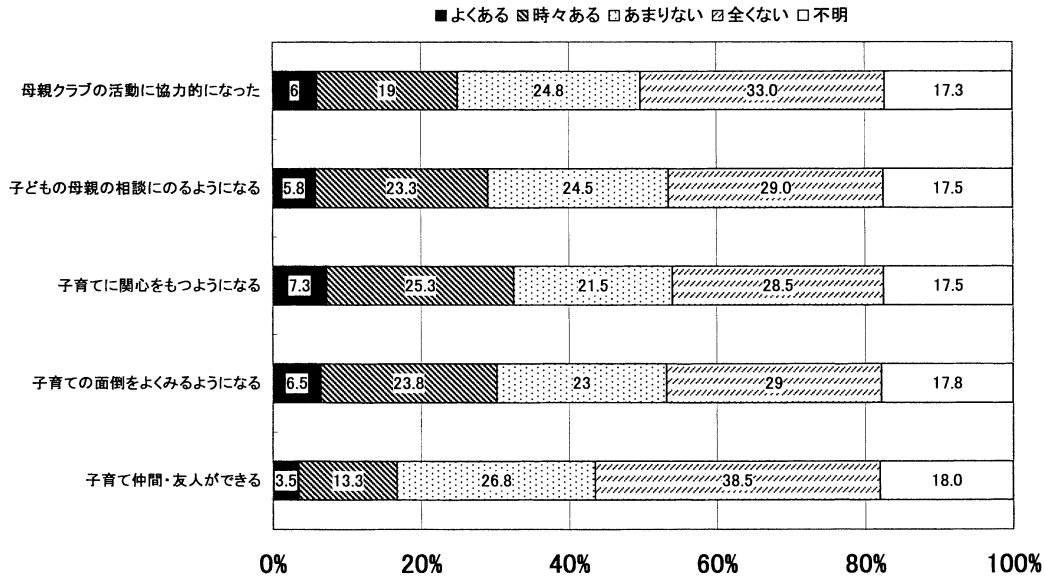

図9　父親への母親クラブの効果

「地域でのつきあいが活発になる」51.0%であった．その他の項目についても半数の母親が地域とのかかわり方に効果があったと答えていた．

母親クラブ活動効果と入会期間との関連については，表2に示したように子どもや父親へ与える効果については，関係がなかった．母親へ与える効果については，「ボランティアとして充実を感じる」という項目以外のすべての項目は，入会期間との関係がなかった．入会期間が長くなるほど「ボランティアとして充実感を感じる」母親が多く，0.1%以下の危険率で有意差が認められた．地域に及ぼす効果については，入会期間が長くなるほど「地域の人が子どもに声をかけてくれる」，「地域の子どもに声をかける」母親が多くなり，5%以下の危険率で有意差が認められた．母親クラブの入会期間の長い母親は，ボランティアとして充実感を感じており，地域とのつながりも強かった．

5－2　活動効果得点の比較

子ども，母親及び父親に与える母親クラブの活動効果そして地域に及ぼす母親クラブの活動効果を比較検討するために，22項目の活動効果得点を求めた．その結果は，図11に示す通りである．

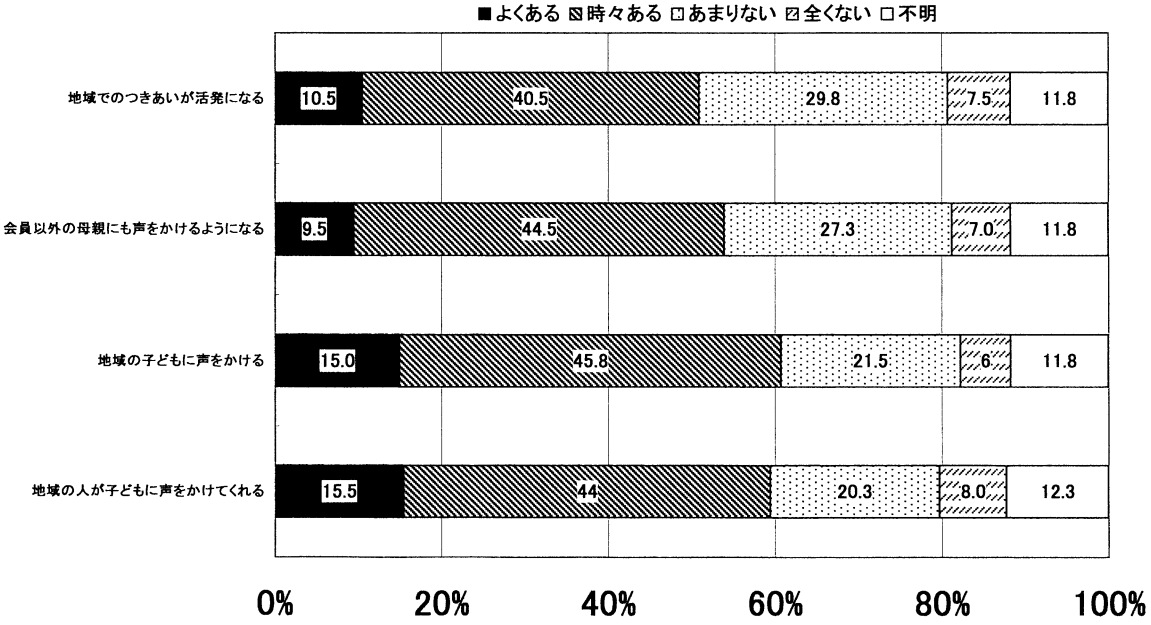

図10　地域への母親クラブの効果

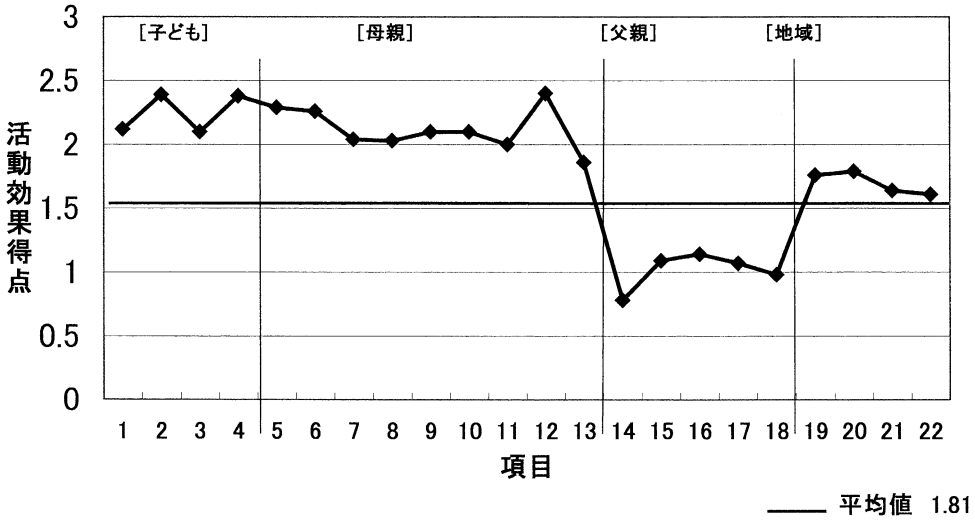

図11　母親クラブにおける活動効果得点

子どもへの効果では「（２）家で体験できなことができる」(2.39点),「（４）楽しい時間が過ごせる」(2.38点) が高い得点になっていた．母親への効果では「(12) 楽しい時間を過ごすことができる」が2.40点と最も高く，次いで「（５）子育て仲間・友人ができる」が2.29点,「（６）子育て情報が得られる」が2.26点と高くなっていた．父親への効果では,「(16) 子どもに関心をもつようになる」が1.14点,「(15) 子どもの面倒をみるようになる」が1.09点,「(17) 子どもの母親の相談にのるようになる」が1.07点となっていた．地域とのかかわりでは,「(20) 地域の子どもに声をかけるが1.79点,「(19) 地域の人が子どもに声をかける」が1.76点と高くなっていた．

子ども・母親・父親・地域別に母親クラブ活動効果得点を比較すると，子どもや母親への効果の項目が1.8〜2.4点と高く，次に地域とのかかわりの項目が1.6〜1.8点となっていた．父親への効果は１点前後で低かった．母親クラブの活動は子どもや母親自身へよい効果をもたらすと高く評価しており，ついで地域に及ぼす効果について評価している．父親へ与える効果に対する評価は低くかった．

考　　察

１．母親クラブの会員の特徴

母親クラブの会員である母親の平均年齢は39.4歳であった．中村ら[22] が実施した親子クラブの調査では，親子クラブに参加している母親の平均年齢は31.6歳であった．親子クラブと比べ，母親クラブの会員は現在子育て中の母親だけではなく，子育ての終了した子育て経験のある中高年齢の母親も参加していることから，年齢が高くなっていたのではないかと推察する．

かつて「子育ての知」[27] は，子どもに伝える内容と方法の両者を含む子どもの育て方すべてであり，幾世代かを通して鍛えられた文化の一部として，社会全体のなかで，あるいは身近な地域社会の人々のあいだで共有されていた．過去・現在のみならず将来においても共有すべきものと認識されていた．子どもを囲む一定の範囲の人々がこの「子育ての知」を共有していたので，親がかかえる個別の事情や力量不足や偏りがあっても，常に家族外の他者が補正するという社会的な力が働いていた[27]．今日でいうところの「地域における教育力」が機能していたといえよう．しかし，現在は「経験の知」ともいえる経験を統合化した「子育ての知」の伝承や共有は著しく困難になってきている[27]．母親クラブに子育て経験のある中高年の母親が参加していることは，重要である．子育て中の母親は，子育ての知を経験的に習得することができるからである．ここに母親クラブに参加することの重要な意義を見出すことができる．

家族形態については，核家族が62.7%で，３世代家族は29.1%であった．平成12年の国民生活基礎調査[28] では，核家族が59.1%，３世代家族が10.6%であるのに対し，本調査結果では３世代家族は全国の約３倍になっていた．同居はしていないが近くに自分の母親や夫の母親など家族のいる人が約７割を占めていた．また，約半数の人が10年以上，現在の地域に居住しており，約９割の人が一戸建住宅に住んでいる．以上のことから，K 市の母親クラブ活動に参加している母親は，親族のつながり強く，子育てに関する親族ネットワークが存在していることが推測される．

母親の就労形態については，約６割が専業主婦であり，何らかの仕事をしているものは約３割であった．平成12年の総務省「労働力調査特別調査」[29] によると，妻が65歳未満である典型的一般世帯のうち，夫が非農林業雇用労働者で妻が専業主婦である世帯は33.5%で，妻が非農林業雇用労働者である世帯は37.7%であることが指摘されている．母親クラブに参加している母親は，専業主婦が多いことがわかった．親子クラブの活動効果に関する筆者ら[23,24] の調査でも，専業主婦は68.1%と多くなっていた．わが国の女性の年齢別労働力率の特色は，いわゆる M 字カーブを描いていることであるといわれてきた[30]．近年女性の労働力率の上昇により全体として M 字カーブは上方にシフトしているものの，M 字の形状を依然として残している．20歳後半や30歳前半の女性の労働率が低くなる理由は出産や子育てによるものである．また，常勤の仕事をしながら地域のボランティア活動に参加することは難しいと考えられる．母親クラブが地域のボランティア活動団体であること，また子育て中の母親も参加していることから，専業主婦が多くなったと推察される．

２．子育て環境について

２－１　母親の友人や近所とのつきあいの状況

ほとんどの母親が友人のつきあいがあり，90.6%の母親は近所のつきあいもあることがわかった．中村ら[22] の調査では，近所づきあいのあるものが76.1%，少ないものが23.9%と本調査に比して近所づきあいの少ないものが約１割多くなっていた．先にも述べたように母親クラブに参加している母親は，親子クラブの母親と比べ平均年齢が高く，居住年数も長いことから近隣とのかかわりも多いと推測される．

しかし，本調査でも近所づきあいがほとんどない

と答えた母親が約１割いることに留意しなければならない．牧野[3]は，母親が家族以外に近隣や地域活動など，より広い人間関係をもつことは，育児不安を低めることに大きく関連すると指摘している．また，両角ら[21]の調査では，育児不安を有する群は近所づきあいが少なく，育児不安と近所づきあいとの間に５％の危険率で有意差が認められた．したがって，近所づきあいのほとんどない母親に母親クラブ等の子育てサークル・グループの情報を提供し，これらの活動に参加する機会を通して近隣とのつながりを深めていくことができるよう支援することが課題となってくるであろう．

２－２ 父親の子育て参加状況

父親の子育参加についは88.1％の母親が，夫の精神的支えについては85.6％の母親があると答えていた．中村ら[22]の調査では，父親の子育て参加については95.5％の母親が，夫の精神的支えについては80.5％の母親があると答えていた．父親の子育て参加の数値が本調査より高く，夫の精神的支えが本調査より低かった．これは，中村ら[22]は幼稚園に通園する前の子どもをもつ母親を対象としているからであろう．母親クラブの母親に比べて父親の育児を必要とする機会が多く，またその必要性も高かったのではないかと推測される．

牧野ら[5]は，父親の生活や意識が育児不安に直接関連はしないが，母親の満足感などに影響に与え，間接的に育児不安に影響を与えることを明らかにしている．また，中村ら[22]も父親の育児参加の程度が，母親の主観的健康観，母親の疲労感，子どもの数，父親の精神的支えに影響を与えていることを指摘している．さらに，住田ら[20]も，夫婦間のコミュニケーションの頻度が高いと，夫婦の評価が一致している場合は，父親の育児参加の如何にかかわらず，母親の満足度は高く，育児不安は低いことを明らかにしている．

以上のことから，父親の子育て参加や精神的支えがないと思っている母親を支援する必要がある．母親クラブを運営する者は，父親の子育て参加に関する啓蒙活動や具体的な参加プログラム等を考慮する必要がある．

２－３ 子育ての相談相手と子育ての知識・情報源

子育ての相談相手は，夫83.1％，友人75.9％，自分の父母55.0％であった．子育ての知識・情報源は，友人71.4％，近所の人・知人48.3％，自分の父母41.8％であった．いずれも専門機関をあげている人はそれぞれ3.5％，10.1％と少なかった．中村ら[22]の調査でも，育児に困った時の相談相手として，両親74.5％，夫74.0％，クラブ以外の友人62.6％をあげており，専門家をあげている者は5.0％と少なくなっていた．また，中村らの調査[22]は，育児知識の情報源として友人が84.7％と最も多く，次いで家族78.1％で，専門家は10.1％と少なくなっており，本調査と同様の結果であった．筆者ら[23]の調査でも，子育ての参考にするものは，配偶者65.9％，友人52.0％，学校・保育園・幼稚園の先生42.6％，自分の親42.5％で，相談員・医師などの専門家は4.0％と少なかった．さらに八木[19]の調査においても，子育てにおいて困ったことや悩みを相談する相手として，夫87.4％，友人65.7％，実家の親47.0％，幼稚園の先生32.3％で，児童相談所などの公的機関は4.0％と最も少なくなっていた．

以上のように子育ての相談相手としては夫や友人や自分の親をあげており，子育ての知識・情報源としては友人をあげている．いずれも身近な人を相談相手や子育ての情報源としており，特に友人をあげている母親がいずれも多いことがわかった．友人は同世代であるため子育てについて同じ価値観をもっており，母親クラブ等に定期的に参加することによって身近に接することができるからであろう．

また，母親クラブの母親の65.7％が母親クラブ以外の子育てサークル・グループ活動に参加している．地域の子ども会や児童館．児童センターの幼児クラブや親子クラブ等にも参加し，友人のつながりを拡大している姿勢がうかがえる．

一方，子育ての相談相手や知識・情報源として専門機関をあげている母親がいずれも少なくなっているのは，子育てについて専門家に相談しなければならないほど深刻に悩んでいない可能性もある．また，身近に相談機関がないことや相談機関の場所を知らないからだということも考えられる．しかし，今後，育児ノイローゼや児童虐待など深刻な子育て問題に対する専門的な対応が求められる可能性は大きい．専門家に身近に相談できるような相談システムや専門家に関する情報を提供できる子育てネットワークづくりが重要な課題となる．

３．子育て観について

３－１ 3歳児神話の考え方について

３歳児神話の考え方に賛成していた母親は84.1％であった．女子大生の調査[31]では，この考え方に「賛成」・「どちらかといえば賛成」と答えた学生は91.7％であった．女子大生に比べると，３歳児神話に同感する母親はやや少なかったが，依然として３歳児神話の考え方が母親にも浸透していることがわかる．

３歳児神話のルーツは大正時代にさかのぼるが，戦後の高度経済成長期と昭和48年以降の低経済成

長期に政策的に意図的に強調されたといわれている[32]．大正時代に資本主義体制と近代家族の維持に必要とされて登場した性別役割分業の理念は，高度経済成長期に専業主婦と形で定着し．低経済成長期には，日本型福祉社会の含み資産として高齢者と乳幼児の世話をする専業主婦の存在意義が強調された[32]．しかし，これらの政策的意図は前面にだされることは決してなかった．これに変わって「科学的な知見」すなわち高度経済成長期には，「ホスピタリズム研究」が，低経済成長期には「母子相互作用研究」によって3歳児神話が強調されていった[32]．母親クラブの母親も女子大生も戦後のこれらのイデオロギーに影響を受けているといえる．周知のように平成2年以降，少子化に対する危機感が高まるなかで，平成10年版の「厚生白書」[1]は3歳児神話を真正面から取り上げ，合理的根拠がないと断言し，政策的には大きな方向転換を図った．しかし，依然として3歳児神話は母親たちに浸透している．特に専業主婦はこの考え方を支持していることが明らかになった．専業主婦のほうが子育て不安や子育てストレスが高くなるといわれている[1]．母親たちが母親クラブ等の子育てサークル・グループに参加することによって子育てに対する複眼的視点を養うことは，母親たちの子育て不安やストレスを軽減していくことになると推察する．

3－2　性別役割分業意識や子育て協働意識について

「男は仕事，女は家事・育児」という性別役割分業が定着したのも戦後の高度経済成長期であった．男性は企業戦士として会社で働き，女性は家庭においいて家事・育児に専念する専業主婦が増えていった．今日では男女共同参画社会が指向され，性別役割分業が否定され，子育てについても男女が協働して行うことが求められている．性別役割分業意識については，年齢や職業に関係なく約7割が反対していた．先の女子大生の調査[31]では，「あまり同感しない」・「同感しない」と答えた学生が約8割であった．母親クラブの母親の方が女子大生に比べ，やや同感していない者が少なくなっていた．しかし，総務庁の「青少年の生活と意識に関する基本調査報告書」[33]によると小学校4年～中学校3年の母親については，性別役割分業を否定するものが63.8％であり，これと比べると母親クラブの母親の方が同感していない者がやや多くなっていた．子育て協働意識については，ほとんどの人が子育ては夫婦協働で行うべきだと考えている．また，若い人ほどこの考え方に賛成する人が多かった．

母親クラブの母親の多くは，性別役割分業を否定し，子育て協働意識も高く，男女共同参画社会実現のための新しい価値観をもっていることがわかった．しかし，母親クラブの父親参加は少なく，父親の意識は必ずしも高いとはいえない．今後父親の参加を促すプログラムを検討することが重要であろう．

4．母親クラブの参加状況

母親クラブの入会年数は，3年未満の人と3年以上の人がほぼ同数であった．中村ら[22]の調査では，3年未満の人が74.2％で，3年以上の人は24.3％であった．母親クラブの入会年数が親子クラブなどの子育てグループと比して長いのが特徴的である．その理由は，前にも述べたように母親クラブに参加している母親の年齢が高いからである．また，地域の児童健全育成を支援するボランティア活動なので，子育てを終了した母親たちが参加しているからである．

母親クラブに入会した理由については，自分にかかわる理由をあげている人が半数を占め，子どもにかかわる理由をあげている人は30％前後であった．中村ら[22]の調査では，「子どもの友人を増やす」が86.2％，「子どもを遊ばせる」が68.6％となっており，自分にかかわる理由より子どもにかかわる理由をあげている人が多くなっていた．また，筆者ら[23]の調査でも，子どもの友達を求めて参加しているものが35.3％と最も高く，ついで母親自身の友達を求めて参加しているものが20.5％で，子どもにかかわる理由をあげている人が多かった．母親クラブの場合は，子育てを終了した母親の参加も多く，子育てにかかわるボランティア意識も当然高いので，子どもにかかわる理由より母親自身にかかわる理由が多くなっていたと推察する．

入会期間が長くなるほど，行事の出席回数が多くなっている．入会期期間が長い母親は，会員と話し合う機会も多くなり，母親クラブの中に親しい友人もたくさんいることがわかった．全体的に父親の参加は少ない．しかし，入会期間が長くなると，父親も母親クラブによく参加している．また，役員経験のない人が多いが，入会期間の長くなるほど役員経験も多くなることがわかった．役員になると県や市の母親クラブ連絡協議会，さらに全国母親クラブ連絡協議会に参加する機会が増え，地域の健全育成活動のリーダー的役割を担うようになる．以上のように，母親クラブに入会している期間が長くなるほど，母親クラブの活動が活発になること明らかになった．

母親クラブの活動については，入会期間の長さに関係なく，ほとんどの母親が満足していた．しかし，母親クラブに全く不満や負担を感じていない母親は

34.0%で，66.0%が何らかの負担や不満を感じていることも明らかになった．中村ら[22]の調査では，親子クラブに不満を感じている母親は37.2%と本調査と比べると低くなっていた．また，その内容も役員になることに負担を感じており，しかも入会期間が長い人ほどその負担を感じていることを指摘している．筆者ら[24]の親子クラブに関する調査でも，親子クラブに対する要望として役割分担の軽減や専門職の参加を強く要望していることが明らかになった．母親クラブの場合は，役員経験と母親の年齢や入会期間とは，0.1%以下の危険率で有意差が認められる．役員の経験のある母親は入会期間が5年以上の40歳代の母親が多いこと，すなわち乳幼児期の子育てが終了した母親が役員になることが多い．乳幼児を育児している親子クラブの母親に比べ，役員の負担が少ないと考えられる．

また，母親クラブ活動について母親の不満が最も多いのは「時間帯・曜日があわない」ことである．しかも入会年数が長い母親ほどこのような不満をもっている．一方，入会期間の短い母親は「友達ができない」ことに不満を感じている．今後，母親クラブの活動を実施する時間帯や曜日を検討していくこと，また，入会期間の短い母親に積極的にかかわっていくことが課題となってくる．

5．母親クラブの活動効果

母親クラブの活動効果については，子どもへ与える効果，母親へ与える効果，父親へ与える効果そして地域に及ぼす効果について検討を行った．その結果，子どもや母親自身へ与える効果に対しては，高く評価しているが，父親へ与える効果に対する評価は低くかった．父親への評価が低いのは，母親クラブへの父親の参加自体が極めて少ないためである．中村ら[22]の親子クラブに対する調査でも子どもや母親に対する評価が高く，次に地域とのかかわりを評価し，父親への評価は低くなっており，本調査と同様な結果を指摘している．

子どもに与える効果としては，家で体験できないことができ，子どもが楽しい時間を過ごせることを高く評価していた．母親自身に与える効果については，楽しい時間が過ごせ，子育て情報が得られ，子育て仲間・友人ができることを高く評価していた．父親への評価は全体的には低かったが，父親が子どもに関心を持つようになることを評価していた．地域に及ぼす効果については，母親クラブに参加することによって地域の子どもとに声をかけるようになり，また地域の人が子どもに声をかけてくれるようになったことを評価していた．

以上のことから，子どもにかかわる母親クラブの活動内容については，子どもが楽しめる遊びを展開していくことが大切になってくる．母親にかかわる活動内容については，子育て仲間・友人と子育て情報を交換しながら，楽しい時間を過ごせるような活動を工夫していくことが必要である．母親クラブ内で子どもや母親同士の係わりが活発になれば，結果として地域とのつながりも深まっていく．すでに述べたように父親の子育て参加は母親の子育て負担や不安の軽減に影響を及ぼす．父親が母親クラブに参加する機会や行事を工夫していくことが重要であると思われる．

母親クラブの入会期間の長さと子どもや父親へ与える母親クラブの効果との間には関連性は認められなかった．しかし，母親クラブの入会期間の長い母親は，母親クラブの活動効果として「母親自身がボランティアとして充実感を感じることができること」を評価している．また，地域において地域の子どもや，会員以外の母親にも声をかけることができるようになることを評価していることがわかった．母親クラブは地域の子育てにかかわるボランティア活動である．母親クラブに長く参加することによって，その本来の目的が達成できることを示唆している．

乳幼児家庭教育学級の始めと終わりに集団自記法による調査を実施した牧野[6]は，次のような点を指摘している．①子どもを預けて学習することを通して母親は，子どものことが気がかりで学習できない状態から，自分の学習に専念できるようになること，②「子どものため」と思って始めた学習が「自分のため」になっていることに気づき，乳幼児を持つ母親の学習参加をより積極的に支持するようになったこと，③託児によって子どももまた，集団行動や日常生活行動面でプラスの方向に変化したことを認める母親が多くなったことをあげている．母親クラブの活動効果についても，活動効果を入会期間との関連からみる横断的研究からだけではなく，一定期間の後に活動効果を検討する縦断的研究を行うことが今後の課題となってくる．

ま　と　め

母親クラブの会員である母親の子育て状況と，母親クラブの活動状況と活動効果を検討した結果，次のような点が明らかになった．

（1）比較的年齢の高い母親クラブの会員

子育ての終了した子育て経験の豊富な中高年齢の母親も参加していることから，年齢が高くなっていることが特徴である．子育て中の母親は，母親クラブ活動を通して子育ての知を経験的に習得すること

ができる．

（2）子育て相談・情報源としての友人

ほとんどの母親が友人や近所のつきあいがある．子育て相談や情報源として身近な人をあげており，特に友人の存在は大きい．母親クラブに参加することによって友人のつながりを拡大していくことができる．

（3）依然と浸透している3歳児神話

依然として多くの母親が3歳児神話の考え方に賛成している．母親クラブに参加することによって子育てに対する複眼的な視点を養い，3歳児神話の呪縛から解放され，子育て不安やストレスを軽減できるのではないかと推察される．

（4）入会期間が長くなるほど活発になる母親クラブ活動

入会期間が長い母親ほど，行事の出席回数，会員と話し合う機会，父親の参加，そして役員経験が多くなり，母親クラブ活動が活発である．

入会期間の長さに関係なく，ほとんどの母親が満足していた．しかし，母親クラブに負担・不満を感じている母親も半数以上いる．また，入会期間の短い母親は友達がいないことに不満をもっている．母親クラブの活動時間や行事のあり方を工夫し，入会期間の短い人に対しても配慮した運営を検討する必要がある．

（5）母親クラブの活動が子どもや母親へ与える効果についての高い評価

母親クラブの活動は，子どもや母親自身へ与える効果に対しては高く評価していたが，父親へ与える効果に対する評価は低くかった．今後，母親クラブにおいて母親自身や子どもが楽しい時間を過ごせるような活動内容を工夫するとともに，地域の人達との交流が深まり，父親が参加できる活動を検討していくこと重要である．

母親クラブの入会期間の長い母親は，ボランティアとして充実感を感じており，地域とのつながりも強い．母親クラブの目的は地域の児童健全育成にかかわるボランティア活動を行うことである．母親クラブに長く参加することによって，この目的を達成することができることを示唆している．

以上，母親クラブの入会期間が長くなるほど母親クラブの活動が活発になること，特にボランティア活動に充実感を感じ，地域とのつながりが深まることが明らかになった．今後，母親クラブの活動効果をより明確にするためには，一定期間母親クラブの活動に参加した母親に対して，母親クラブ活動の前後に調査を実施し，活動効果を比較検討する縦断的研究を行うことが課題となってくる．

本稿を終えるにあたり，アンケート調査にご協力いただいた倉敷市母親クラブ連絡協議会会長・難波夏子様，倉敷児童館館長・杉周子様，倉敷市児童館・児童センターの職員の皆様，母親クラブの会員の皆様に感謝いたします．本研究をまとめるにあたり，川崎医療福祉大学医療福祉学科小河孝則助教授にご助言を受け賜りました．また，統計処理をするにあたり川崎医療福祉大学医療福祉学科前川明美さんのご協力をいただきました．心より御礼申し上げます．なお，この研究は平成11年度川崎医療福祉大学プロジェクト研究費の助成を受けて行い，要旨は第8回川崎医療福祉大学プロジェクト研究報告会において発表した．

文　　献

1）厚生省監修：厚生白書（平成10年版），初版，ぎょうせい，東京，82–107，1998．
2）牧野カツコ：育児における＜不安＞について．家庭教育研究所紀要，(2)，41–51，1981．
3）牧野カツコ：乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞．家庭教育研究所紀要，(3) 34–56，1982．
4）牧野カツコ：働く母親と育児不安．家庭教育研究所紀要，(4)．67–77，1983．
5）牧野カツコ，中西雪夫：乳幼児をもつ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連—．家庭教育研究所紀要，(6)，11–24，1985．
6）牧野カツコ：乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安．家庭教育研究所紀要，(9)，1–13，1987．
7）牧野カツコ：＜育児不安＞の概念とその影響について再検討．家庭教育研究所紀要，(10)，23–31，1988．
8）大日向雅美：育児にともなう母親の不安．小児看護，**12**(4)，415–420，1989．
9）服部祥子・原田正文：乳幼児の心身発達と環境—大阪レポートと精神医学的視点—，初版，名古屋大学出版，名古屋，125–251，1991．
10）菅原ますみ，北村俊則，戸田まり，島悟，佐藤達哉，向井隆代：子どもの問題行動の発達：Externalizing な問題傾向に関する生後11年間の縦断的研究から．発達心理学，**10**(1)，32–45，1999．
11）川井尚，庄司順一他：育児不安に関する基礎的検討．日本愛育研究所紀要，(30)，27–39，1994．
12）川井尚，庄司順一他：育児不安に関する臨床的研究—幼児の母親を中心に—．日本愛育研究所紀要，(31)，27–42，

1995.
13）川井尚，庄司順一他：育児不安に関する臨床的研究 II—育児不安の本態としての育児困難感について—．日本愛育研究所紀要，(32)，29–47，1996.
14）川井尚，庄司順一他：育児不安に関する臨床的研究 III—育児困難感のアセスメント作成の試みに—．日本愛育研究所紀要，(33)，35–56，1997.
15）川井尚，庄司順一他：育児不安に関する臨床的研究 IV—育児困難感のプロフィール評定試案—．日本子ども家庭総合研究所紀要，(34)，93–111，1998.
16）川井尚，庄司順一他：育児不安に関する臨床的研究 V—育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成—．日本子ども家庭総合研究所紀要，(35)，109–143，1999.
17）川井尚，庄司順一他：育児不安に関する臨床的研究 VI—子ども総研式・育児支援質問紙（試案）の臨床的有用性に関する研究．日本子ども家庭総合研究所紀要，(35)，117–138，2000.
18）諏訪きぬ，戸田有一，堀内かおる編：母親の育児ストレスと保育サポート，初版，川島書店，東京，3–233，1998.
19）八木成和：乳幼児をもつ母親の育児不安に関する研究—育児観と育児サポートとの関連について—．IBU 四天王寺国際仏教大学紀要，**32**(40)，63–76，1999.
20）住田正樹，中田周作：父親の育児態度と母親の育児不安．九州大学大学院教育学研究紀要，(2)，19–38，1999.
21）両角伊都子，角間陽子，草野篤子：乳幼児をもつ母親の育児不安に関わる諸要因—子ども虐待をも視野に入れて—．信州大学教育学部紀要，**99**，87–98，2000.
22）中村祐美子編，育児グループにおける地域組織活動の活動効果の測定指標に関する研究，岡山市，31–91，2000.
23）奥山清子，八重樫牧子，林基子：岡山市の子育て支援（4）—「子育て広場」と「おやこクラブ」の比較を通して—．ノートルダム清心女子大学紀要　生活経営学・児童学・食品栄養学編，**24**(1)，121–130，2000.
24）奥山清子，八重樫牧子，林基子：岡山市の子育て支援（5）—「おやこクラブ」の活動評価・要望の調査研究—．ノートルダム清心女子大学紀要　生活経営学・児童学・食品栄養学編，**25**(1)，74–83，2001.
25）児童手当制度研究会監修：児童健全育成ハンドブック（平成13年度版），初版，中央法規，東京，31–33，2001.
26）倉敷市保健福祉局保健福祉推進課編：保健福祉の概要（平成13年度版），倉敷市保健福祉局保健福祉推進課，倉敷市，104–105，2001.
27）庄司洋子：家族・児童福祉の視座．庄司洋子，松原康雄，山縣文治編，家族・児童福祉，初版，有斐閣，東京，13–34，1998.
28）厚生労働省監修：厚生労働白書（平成13年版），初版，ぎょうせい，323，2001.
29）厚生省監修：厚生白書（平成12年版），初版，ぎょうせい，23–24，2000.
30）総理府編：男女共同参画の現状と施策（平成 9 年版），初版，大蔵省印刷局，東京，21–24，1997.
31）八重樫牧子，奥山清子，林基子，小河孝則：母親の就労が女子大生の就労観や子育て観に与える影響について．川崎医療福祉学会誌，**11**(2)，245–253，2001.
32）大日向雅美：母性愛神話の罠，初版，日本評論社，83–115，2000.
33）総務庁青少年対策本部編：日本の青少年の生活と意識（青少年の生活と意識に関する基本調査報告書），初版，大蔵省印刷局，東京，122–155，1995.

（平成14年 6 月12日受理）

A survey of Mothers' Clubs' activities and the future problems in supporting mothers' child care

Makiko YAEGASHI

(Accepted Jun. 12,2002)

Key words : MOTHER'S CULBS, ANXIETIES ABOUT CHILD REARING, CHILD CARE SUPPORT, FEWER NUMBER OF CHILDREN, CHILDREN'S HALLS

Abstract

Some factors, such as the development of urbanization and increasing nuclear families, but whit fewer children, have lead to isolated families and also weakened the functions of bringing up children in families and the community around them. In these situations, mothers tend to be much more anxious about bringing up their children. It is often seen as an obligation or a burden for them. To reduce these mothers' anxieties and problems, along with issues about fathers' participation in their families, an active support network e.g. mother's clubs in the communities is needed.

In this study, we examine some effects of the activities of Mothers' Clubs for supporting child care by means of a questionnaire -survey. We questioned 402 mothers of Mothers' Clubs. The results show that the average age of mothers, around forty, is a little older than we expected. It also became clear that the longer the duration of membership was, and the more frequent their attendance at events , and the chances were that more communication would occur, and their husband's participation and the experience of the readership also increased. Most mothers are satisfied with Mothers' Clubs' activities regardless of the time they participate in them. While they highly evaluate the effect of their participation in the club for themselves as well as their children, they underestimate the effect of the activities on their husbands.

As a result, we may suggest some ideas for the activities of Mothers' Clubs. For example, they had better make their activities more full and rich, so that both mothers and children have a really a good time there. At same time, they need to improve the events for husbands. In this way, we can also expect that they promote an interchange within the community.

Correspondence to : Makiko YAEGASHI Department of Medical Social Work,Faculty of Medical Social Work
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki , 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.12, No.1, 2002 27–43)